

ネパリ・バザー 回 だより

第 19 号

ベルダレルネーヨ通信

1999 年 2 月

ネパリ・バザーは、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ（NGO）であるベルダレルネーヨ（ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会）のトレード部門として1992年から活動しています。1998年2月からは、地球市民かながわプラザに直営店「ベルダ」をオープンして第三世界からの品々をご紹介します。

<特集>

女性と仕事シリーズ

その2

「サングワサバの
女性達と自然素材
アロー」



乳しぼり・・・阿部修さん画

目

<特集> 女性と仕事シリーズその2

「サングワサバの女性達と

自然素材アロー」・・・2

ーアローの生産から商品化までの道のりー

「生産者訪問ツアー」

ー初めてのネパール、初めての生産者へー

地球市民交流基金アーシアン高橋広子 ・6

次

「IFAT 情報コーナー」

ーアジア地域会議報告ー・・・8

「子どもたちを訪ねて」・・・10

ーモーニング・スター・チルドレンズ・ホーム訪問ー

「新人紹介」 山下亜紀子・・・11

「楽しかったネパールダンス教室」・・・11

「お知らせ・編集後記」・・・12

働く女性たち

「サングワサバの女性達と

自然素材アロー」

～アローの生産から

商品化の道のり～

ここでご紹介するのは、「アロー」と言う植物の繊維から作られる製品で、現地の人々がその自然素材を生かして生産して来たものです。その変化と発展に関わってきた女性達の状況を、ネパールのNGO、サナ・ハスタカラのチャンドラさんに現地取材をして貰いました。以下、そのレポートを基にアローについて特集しています。

アローのふるさと・その歴史

イラクサ科のトゲだらけのアロー（英名：ヒマラヤンジャイアントネットウル）は、ネパールでも標高2,000m前後のやや高地に昔から自生しているものです。ネパールの東部にあたるマカルー（エベレストの東隣りの山）の麓の「マカルーパルン国立公園地域」のサングワサバ地区は、アローの生産で有名です。そこまでは、バスで18時間、更に徒歩で4日、または、飛行機で40分、更に徒歩で2日かかります。ここでは、プロジェクトの成り立ちや女性の活動の変化をご紹介します。

ここサングワサバ地区では、各家庭で昔からアローの繊維を使って衣類やベルト、ザックなど生活用品の様々な用途に役立ててきました。

そして、イギリスの交接によるプロジェクトの調査が始まり、1984年にこの地域にアロー布を織って収入向上を図るための道が模索され始めました。翌年このアロー製品をカトマンズのフェアトレードグループの1つであるマハグティが販売する試みがなされました。



<アローの植物>

その後も、関係者の指導を得て、素材と民族色を生かした製品を市場に出す努力が続けられ、それにより生産者の伝統的な手法で生産を続ける道が開かれました。

当時、市場に出された製品は、袋物（バッグ類）・ザック・ベスト・漁網・織物などでした。それらは、2地区でのごく少ない生産で、その技術の修得や商業的意義は模索段階でした。しかし、1年が過ぎて、この試みに少し希望が持てるようになり、生産者（殆どが女性）をグループ単位としてもっと拡大することが可能となりカマンズでの旅行者や海外市場に向けたふさわしい商品作りへの改善が図られて来ました。

そして徐々に海外からの支援やカトマンズでの販売が好調となり、アロー製品の需要増加が見込まれると、それに応じた生産者の数を増やす事が可能となり、地域の女性達にトレーニングを行えるようになりました。

幸いなことに、この地域の国立公園保存プロジェクトとしても地域の収入向上に力を入れ始め、クラブ運営のスタッフ作りや回転資

<アローミニ知識>

高度1,200～3,000mの高地に生える巨大イラクサ「アロー」は、高さ3m、茎の直径4cmにも育ち、茎も葉も花も細かい棘におおわれています。棘は毒を含んでいますが、痛みは30分ほどでおさまる程度のもです。12月になると、30cmの房に緑色の小さな花を咲かせ、種は雨の多い初夏に発芽します。

収穫は8月から12月まで。村から離れたアロー密集地に男女が数日かけてでかけます。ロキシーという酒も持参した楽しい行事です。成長した太い茎を探し、新たに発芽できるよう地面から15cm位の所で切ります。雨季に多いヒルを避け、布で棘から手を守りながら何百本という茎を刈り取り、その場で皮と芯に分け、カゴに入れて持ちかえります。

天然繊維の人気でアローの栽培も試されています。アローは耕作に不適な場所に育つので食物栽培と競合することはありません。アローの価値を認識することは森の保護にも役立ちます。

金の提供を始めるなどの努力がなされました。

クラブの設立と構造

1990年、それまで2地区で非公式に結成されていたグループの活動が、公式に「アロー布織りクラブ」として正式登録され、30人位で始まったものが、今(1998年)では、4グループ272人となっています、このクラブの設立目的は、以下～です。

国内と海外の市場にふさわしいアロー製品の生産を行うためのトレーニングを提供すること

サンクワサバ地区の人々、特に女性に対しアロー布生産の動機づけを行い、必要なマーケティング・サポートを提供すること

成人に対して識字教育を行い、また、他の関連訓練プログラムを実施すること

女性の為のエンパワーメントと開発を行い、社会的経済的な状態を改警するプログラムに着手すること

市場の要求に応じて、アロー織りを別の地域にも拡げていくこと

更なるアロー織りクラブの設立やそのサブクラブの設立を行い、市場や生産の拡大を促進し、それらの機能を保持しながら成長がうまく機能するよう努力すること

この組織として11のサブクラブが有り、個別に注文を受けいて、一番多く受けているのがシスワ地区にある中央クラブです。



＜サンクワサバ地区でアローマットを織る女性＞

各クラブには、労働委員会があり、その会合は毎月行われています。注文を受けると、その仕事の分配が検討され、生産者の熟練度や特別な製品を織る能力の有無などに従い、分配されます。

織る人は、アローの糸は自分で購入したり管理しますが、ウールや他の製品を作るのに必要なものは、クラブを通じてカトマンズから取り寄せられます。個々の織り人は、注文毎に自宅で生産し、クラブへ納品するのです。生産者はその製品がカトマンズに送られてから1～2ヶ月後に製品毎に決められた基準で支

* アロー織りができるまで

採取されたアローは、木の灰を入れた湯で2、3時間、たいてい食食用のかまどでゆでます。そして柔らかくなったアローを手作業で繊維と余分なものにより分けます。その後繊維を滑らかにするために雲母の土を水で溶いたものをまぶし、繊維を吊るして日に乾かします。乾燥して雲母を払い落とすと繊維のできあがりです。紡ぐのには、竹・木製の軽いはずみ車が使われます。はずみ車で紡ぐのは、手紡ぎ機で紡ぐよりも時間がかかりますが、持ち運びしやすいので、腰に繊維を巻き付け歩きながらも紡がれます。こうしてできたアローの糸はなめらかでとても丈夫なものです。

アローは、昔から体で機を支えるいざりばた式で織られていました。地面に立てた棒を使って整経して機にかけ、畑仕事の少ない冬に上着やベスト、日用必需品の袋などが作られます。

1980年代に入り新しいアローの織物が開発されはじめ、はじめてアローの糸が4枚綜紉の織機にかけられたことで、模様織りができ、製品の幅もひろがるようになりました。

払いを受けますが、その時、クラブは、10%の利益と8%の配達責を受け取ります。

アロー生産の村人への影響

アロークラブは、過去10年に渡ってこの地域の女性通に唯一の現金収入の道であるアロー布の生産での継続的な収入を提供してきました。それまでは、ごく限られた人々が無計画に生産し、近の市場で売って僅かの収入を得ていたに過ぎません。アロー布の生産と加工による平均的収入は、1ヶ月1,000～1,500ルピーです。これは、一般的家庭の家

* アローの利用法

アローはヒマラヤ中部山岳地帯で、マガル族、タマン族、グルン族、そして特にライ族にとって千年以上の昔から衣料、食用にと必要とされてきました。織りでは、衣服、マット、袋、魚網、ロープ等に使われ、特に魚の網やロープとしては今でもアロー製のものが丈夫なので人気があります。ライ族の男性はアローで織られ、美しい刺しゅうが施されたジャケットを着る伝統があり、一着は大英博物館にも所蔵されています。

アローから作られるのは繊維だけではなく、若芽や若葉はほうれん草のように料理されて貴重なビタミン源となります。また保存食や薬の原料にもなり、葉を煎じたものは頭痛や関節痛の処置に使われ、発熱にも効き目があると言われています。トリブバン大学の応用科学技術センターは、繊維採取に使われた煮汁から青い染料が取れること、繊維を採取したあとに残る茎の内側は製紙に使えること、アローの種は10～12%の油を含むので石鹸やその他、油から作られる製品に用いられることを明らかにしています。



＜ドコと呼ばれるバスケットに付けられた帽子の上にあるキャリング・ストラップは、伝統的アロー製品の1つ＞

計負担を軽減し、少しづつお金を貯めて土地を確保したり、貯金をしたりして、生活改善のモデルケースとなりつつあるのです。女性達は、社会の中で役目を持つこと、意思決定をすることを自覚し、識字、貯蓄、社会福祉などの活動も始めました。

この地域では、今だにヤギが何頭いるかが富の象徴です。多くの女性達がアロー生産の収入でヤギ、水牛、そして鶏を調達できるようになりました。地理的条件が厳しい中で、このように現金収入を増やす手段として有効なことが、女性達の団結を強くし、プロジェクトの取組への理解が進みました。

村の女性の声を聞きました

* ダンシリ・ライさん 22才、女性、既婚

私は、結婚して子供が1人いて、私の両親を含め家族7人と暮らしています。学校には行かなかったのですが、識字学級で自分の名前を書けるようになりました。主な仕事は農業です。この地域は耕作に適した土地が不足していて、生活は大変です。食料の不足は慢性的便性的で、男性は冬の間出稼ぎに行かなければなりません。

私がアロー布の織りのトレーニングを受ける以前には、私の母親が細々と織っていましたが、あまり家計の助けにはなりませんでした。私がアロー生産に関わって収入が向上すると、男性の応援も得られるようになりました。私は、自分の子をアロー生産から得た収入で字校に行かせています。1年に4,000ルピー相当の製品を売り、その半分を糸を買うために使っています。クラブで売の方が、村の市場より時間が節約でき、値段も良いので収入も向上しました。私はトレーナーにもなり、他の人をトレーニングすることにより更に収入が増えました。また、私は12人の女性達のサブ委員会のグループリーダーにもなっています。

現在の課題として、

アロー糸の供給が安定しないことと、需要

が高まった時への対応

品質維持の難しさと返品処理の難しさ

クラブは、最も安全な販売市場と見られていて他へ売ろうとしないこと

織り人は自ら新しいデザイン開発をせず、ただクラブの求めているものしか作らないこと

もし、アロー生産が減れば再び食料不足を補うための負債に悩まされることなどがあります。

(注)ネパリ・パザー口としては、来年、現地を直接訪ねて状況を把握したいと思っています。

<日本のイラクサ、からむし織り>

日本にもイラクサから繊維を取る伝統的な織物があります。アローと同じイラクサ科ですが、高さ2m、茎の直径2cmと、アローに比べるとずいぶん小ぶりな種類です。福島県の会津上布、新潟県の越後上布、沖縄県の宮古上布などがあります。からむし織物は通気性、吸湿性、肌触りが非常に優れ、高温多湿の日本には欠かせない素材として評価されて来ましたが、大変な手間と時間と人手を必要とするため、その技術は失われつつあります。

*この特集で掲載した写真、及びコラムの大部分は、NEPALESE TEXTILES by SUSI SUNSMORE より引用したものです。

ネパリ・バザーリがお届けする素敵なアロー達

このように日本へはるばるやってきたアロー達。ネパリ・バザー口でもさまざまなアロー製品を皆様へお届けしています。以下の商品はフェアトレード商品カタログ「ベルダ」でお求め頂けます。



繊細なショールにアローの個性がびったりです。
¥6,000

素肌に気持ち良いクッションカバー。
¥2,800



ご存知「不幸と闘うあくまくん」。お部屋のマスコットにどうぞ。
¥600



テーブルセンターに。長い物と短い物があります。
¥800 ~ 1,600



一年中着まわしがきく便利な一着。男女兼用のベストです。
¥4,900 ~ 5,700



アロートートバッグ。3色揃ってます。
¥2,800

・@初めてのネパール、
初めての生産者へー
地球市民交流基金 アーシアン
高橋広子

今から5年前に設立された柏市にある「アーシアンショップ」は、私達のフェアトレードのお店で、ネパリ・バザーの商品も沢山扱っている。

今回、ネパリ・バザーの土屋さんに「ネパールの女性たちのNGO活動や、フェアトレードの製品を作っている生産者の皆さんに会う」をテーマにスタディツアーをコーディネートしていただき、アーシアンから6人が参加した。

11月18日正午、晩秋の日本を飛び立って、カトマンズにあるトリブバン国際空港で待つ土屋さんに会えたのは19日午後1時過ぎ。ネパールは遠い国だった。気候は、日本の10月初旬の感じ、まだ半袖でも大丈夫だ。

国の財政の4割を援助に頼り、世界の最貧国の一つに数えられているとは聞いていても実際に足を踏み入れるまでそのことを実感するのは難しいものだ。空港から市内のホテルまでの道で見た沢山の物乞い、路上の物売り、貧しい家々。市内も、土産物店がずらりと並んでいるが、そこに寝そべる犬、ゴミをあさる牛。その間を行き交うリキシャと車と人。そしてものすごい排気ガス。大変なところへ来てしまった！！

翌日、44人乗りのプロペラ機でジャナカプールへ移動。ここは、「ラーマヤナ」にも登場する古都だとか。大きなヒンドゥー寺院があって、朝もやの中で沐浴をする人々が美しかった。JWDCのチーフマネージャのアンナプルナさんの住むラクシミプール村を訪ねた。お手製の軽い食事(おいしかった)を頂いた後、村の中にあるJWDCのスタッフの家々を訪問した。そろそろと歩いて歩く子どもの数が増えて行く。



<ラクシミプール村にて>

スタッフの女性達は、明るく堂々としているし、家々の壁にはカラフルなミティールアート(このマイティリ地域で親代々伝統的に受け継がれてきた絵)が実に伸び伸びと描かれている。このセンターで動いている方々の子ども達は、学校への就学率も高いそうだ。ついこの前まで、サリーを目深に被って人前に出られなかった女性たちだとは思えない。女性が経済力をつけていくことの大切さを思った。

ヒマラヤの展望台といわれるナガルコットで迎えた朝は素晴らしかった。日の出も、そして真っ青な空の下にみえた白く輝く山々も。外国の観光客はこの辺りからトレッキングに出かけていくので、この国の本当の姿は見えてこない。ホテルも殆どが外国資本だという。

古都のバクタプールへ行った。殆どの建物が17世紀までのものだと言う。赤レンガの数層の建物が精巧な木彫の窓で飾られてそれは素晴らしいものだった。当時としては先進的なこれだけの建築物群を創る文化、技術をもった国だということを私は知らなかった。

生産者の皆さんを訪ねた。数台の織り機の前で女性たちがタカ離りを織っている。1日に織れるのはわずか数十センチ。出来高高いので、収入は人によって違うそうだが、それが貴重な現金収入になっていく。山奥から機織りを習いに来ている少女達も受け入れている。彼女たちのつくる美しい色合いの手織

りの布がさまざまに縫製されて日本までやってきているのだ。

「マハグティ」は、ガンジーの教えを受け継ぐ、NGOだ。マネージャーのスレンドラ・サビさんが、実に滑らかに説明してくれた。プロジェクトは、多岐にわたっている(150グループ700人が携わっている)糸を紡ぐことから、染色、機織り、縫製まで。手漉きの紙にウッドプリントする部門もあった。世界中のフェアトレードの店やNGOから注文が来ている。マハグティの収入の53%が輸出によっている。

ここの女性たちは、1mの布を織ると7ルピーが支払われる。しかし普通の工場だと3ルピーなのだそう。出産休暇中も有給であり、工場内には託児所もあった。女性の地位向上のための基本姿勢がしっかりとあるという感じがした。

その他、主に紙製品のさまざまなグッズが作られている「ウーマンクラフト」という生産者は、女性ばかりでなく障害者や老人にも就業の機会を与えたいと考えていた。

そして、私たちが一番印象に残っているのがデビおばあちゃん。すっかり予定が遅れてしまって、着いたのは夕刻。小さな織り機で木綿や絹で色合いのきれいな布を織り、サリーの横に下げる小さな袋をつくって「サナハスダカラ」に納めている。ネパール語しか話さないのだが、どんなに私たちが来るのを待っていたかを、感情を込めて話したら、なんとなくこのおばあちゃんの言うことが分かってくるのだから全く不思議！門の外でいつまでも見送ってくれた。

そして、その日はホームステイの日。皆で土屋さんにくっついていったのが、2人ずつの分宿になった。いい加減な英語しか話せないが、まあやるっきやないわけで……。私たちの宿泊先はあのサラダさんバッグで有名なサラダさんのお宅。息子さんが二人いるが、二人とも家を出て勉強中で、ご夫婦二人暮らし。夫のバットリー氏は政府職員。サラダさんは8人の織り子さんを雇う事業主である。お二人と

も本当にネパールという国を何とかしたい思いで一杯のようだった。バットリー氏は、技術者として若い頃は、山奥の人々のための水資源開発の為に、道も無いような山奥に入ったとか。つい最近、日本のODAの援助で日本の砂防技術の研修を受けて国に砂防センターを建てて、後進の指導に当たっていた。「ネパールが一番の問題は公害です」と言うバットリー氏。現在は水資源と森林の保護の為に有効なエネルギーとして、家畜の糞を発酵させてガスを取る方法の普及に力を入れている。

サラダさんは、どんな製品を作れば日本の皆さんが買って下さるのでしようと、とても真剣な表情で次々と試作品を見せて下さった。やはりここでもマーケティングの重要性を思い知らされる。この国は一度も他国に支配されたことは無いそう。然し、経済的な侵略にはひとたまりもなかったということだろう。主な輸出品が絨毯や繊維製品では世界経済の中で自立した国として生きるのとはとても困難だと思う。

このツアーで出会った人々と、それを支える人々との輪が少しでも太く強くなっていき、共に考えていくことでホンの少しずつでも変わって行けたらいいと思っている。

ナマステ

注1) 1ルピーは約2円

注2) JWDC:KJanakpur Women's Development Center



<サラダさんご夫妻とともに>

- IFAT アジア地域会議 - (ネパール)

1998年11月1日から11月5日まで、カトマンズでIFAT地域会議が開かれました。 بانکラディッシュ、インド、スリランカ、フィリピン、インドネシア、タイ、ネパール、オーストラリア、イタリア、アメリカ、イギリス、ケニア、ヘルーの14ヶ国、約80人が集まり、5日間を通じて開会式、討議、セミナー、親睦会などが開かれました。今回は、私達の活動拠点で開かれるとあって、意気揚々と参加しました。

会議は、全て英語で行われました。参加者の肩書きは、ディレクターとか代表という方が多かったようです。会議前日の懇親夕食会でお互いに名刺交換したり、自分の団体の目的や今目指していること、自分の活動への思いなどをお話する機会があり、翌日、女王が出席してのロイヤルパレースでの開会式、そして、出席生産者団体によるフェアトレード商品の展示会が行われました。その翌日早朝から夕方遅くまで熱心に討議、セミナー、発表が行われました。

今回の討議事項のポイントは、来年、イタリアのミラノで開かれる年次総会(AGM)へ向けてアジアからの課題提起や懸案事項に対する意見をまとめることです。



< 会議初日、ボードメンバーが揃って挨拶 >



会議の初めに、会議で討議して欲しい要望事項を参加者から出してもらい、それを基にア

ジア・パートナーとして提言書(Regional Issues/expectations and formulate recommendation)を、各参加者を6人から10人にグループ分けして討議し、発表、質疑して行きました。その後、それをアジア地域の中でどのように協力し合えるかを翌日同じような形式で討議、発表、質疑を通してまとめあげます。そして、それを達成するためにはどうすれば良いかを最終日の討議で話し合いがされました。

その概要は、以下のような内容です。

- 1 : 生産者に対する通性価格(地域における適性な価格)
- 2 : 透明性
- 3 : 買い手への責任
- 4 : 仲介者(ミドルマン)の問題
- 5 : 児童労働の排除
- 6 : 市場の拡大への取組

話し合いの中で、CONSOLIDATION(合併)という言葉をよく聞きました。お互いの団体間のコミュニケーションを図るにしろ、協力するにしろ、組織力強化のために何らかのコンソリデーションが必要と強く感じていたようです。そして最終提言書は大

方以下のようなものになりました。

- 1 : アジアのメンバー間のコミュニケーション(不足していると感じている)
- 2 : 品質向上
- 3 : 原材料 (RAW MATERIALS: Dye, Organic) の積極的採用とその為の技術トレーニング

そして、それを提言書にまとめあげて行く段階では、お互いの相互協力の必要性 (Trade, Technology & Skill Transfer, Networking)、ラベリング (フェアトレード・マーク)、製品開発などの話合いが熱心に行われました。ラベリングとそのモニターに関しては、来年のミラノ会議で各地域会議の意見を織り交ぜて決定される予定です。

その他、この会議を通じて、インターネットのフェアトレード・グループへの参加を強力に推し進めている People Link 社 (NPO: アメリカ) のセミナーや、ローン会社 (イギリス: フェアトレード商品を購入する消費者が、更に積極的にかかわるためにお金をここへ預け、その資金をもとに、フェアトレードにプラスになる活動を推進: 一人平均預金高 40 万円: 会員 7,000 人) のセミナーが行われました。

会議を通して感じたことは、アジアにおける日本の微妙な立場です。アジアの提言



< セミナーでお互いの通信手段の有効性を説明する Peoples Link 社。生産者にインターネット領域を開放して情報交換の場を提供 >

書は生産者の立場での提言 (だれが決めたかは別にして) となります。買い手としての立場は日本だけです。それも参加はネパール・パザールだけ。討議していても立場があまりにも違い、参加方法での違和感を強く感じました。

会議を終えて、IFAT の議長 (最高責任者) ポール・メイヤー氏 (Ten Thousand Villages: アメリカ) から日本はアジアの中でも立場が違ふし、といって、欧州、アメリカとも違う。だから、その意見や立場を反映するには、ボード (理事会) に代表を出して欲しいと思うとの話がありました。その期待とは裏腹にあまりにも小さい日本のフェアトレード界の現状をつくづく思われた会議でもありました。日本が世界の中で信頼を勝ち取って行くには、あまりにもその経済力と比べて弱い社会活動の実態を知らされた会議であり、更にフェア

トレードを広めて行きたいと強く感じた会議でもありました。



< 会議終了前夜、会議場となったマルコポーロビジネスホテルの屋上で撮影 >

* IFAT (INTERNATIONAL FEDERATION FOR ALTERNATIVE TRADE)

45 ケ国 100 団体を超える世界的な組織で、オランダの法律に基づいて登録された団体です。世界の富と貧困の構図を、買い手と生産者が協力することにより改善していこうとしています。

「子どもたちを訪ねて」

ーモーニング・スター・チルドレンズ・ホーム訪問ー
(1998年11月)

私が突然伺った時は、憲法記念日の祝日(11月9日月曜日)の3時近くであったので、子どもたちは全員、お家にいました。アルジュン君とレベッカちゃん、コピラちゃんそして見慣れた子どもたちが親しそうにアンクルといいながら歓迎してくれました。

あと数ヶ月でプレム君とジーバン君がSLC(学業終了資格検定)を控えていましたが、プレム君はかなり優秀で、第1得点圏に入るだろう、ジーバン君は第2得点圏に入るだろうとのアルジュン君の談。3時から勉強の時間が始まり(全体の面倒はプレム君)、私は小学生低学年の子どもとネパール語の教科書を読む勉強をするはめになりました。みな、いろいろ教えてくれて優秀です。その間も、コピラちゃんが、「アンクル カンジージ、お茶をどうぞ」とネパール語で世話をやいてくれます。いろいろなことを、時おり聞いてきます。勉強のじやまをしているみたいです。ちよっとわからなくなると、英語で聞き返してきます。最近、意思疎通ができるようになって来たのが嬉しい。アルジュン君と話しているあいだも、そばにいて離れない子どもたちがいました。

次のSLCを受ける子どもたちのこと、3人の看護婦になりたい子どもたちのことを話し



< 3時の勉強をしているところ >

合いました。SLCの第2得点圏をクリアできれば、看護婦になる為の学校へ進学できる可能性があるということでしたが、タメルのクリニックをお手伝いしているネパール人の医者の方(AMDA)が彼女達のことを理解しており、ジャバの病院がそのトレーニング機関を持っているので推薦してあげると言っているそうです。ともあれ、ジャバは速い。やや心配もあって自分としても確認しておきたいと思い、UMNパタン病院の木村先生から情報を頂き、コーヒー調査でジャバへ行った時には訪問してみようと思いました。

ビシュヌさんとお話をしていると、そこへアメリカから来ているという女性が、「ハイ」と2階から降りて来ました。大学を卒業して次の就職までの間、約6ヶ月、ここに滞在するそうで、早1ヶ月が経ったとか。子どもたちにも刺激があることでしょう。

アルジュン君は、その後3日間、パネバで開かれたドラッグ防止の青年の集まりに出席。ソーシャル・ワークとして、その活動をしています。就職のことになると、大変そうでした。これから、ぞくぞくと大きな子どもたちをみていて、みんな本当に心温かい人間として良くここまで育ったなと思う反面、これから、自分たちの本当の人生が始まる。厳しい就職環境、労働環境の社会をみていて、なんともいいようのない気持ちになりました。(完二配)



< ホームの子ども達、全員そろって玄関先にて >

「新人紹介： 山下亜紀子」

ネパリで働くようになって、早くも半年が経ちました。以来、ずっと戸惑っているのが、人から「今何の仕事をしてるの？」と聞かれるときです。「フェアトレード」という言葉を出したところで、すぐさま理解してくれた人など一人もい



ず、国際協力だとか、生産者の支援だとか、NGOだとかいう言葉を出そうものなら、ますますよくわからない、という顔をされるのがおちです。

そんなとき私は、二つの思いにとらわれます。一つは、私たちの日常生活が、突き詰めれば実に色々な面で、いわゆる第3世界とよばれる国々の人たちを踏みつけにしているというのに、どうしてその不公平に無関心でいら

れるのだろう、という失望とまでは言いませんが、それに似た思い。でも、もう一つは、日本にはまだまだこんなにも眠れるフェアトレード市場があるんだ、という希望と呼べる思いです。今はまだフェアトレードなんて聞いたこともない、という人も、いつかどこかで偶然にその商品を手にして、気に入って、買う機会があるかも知れないのです。そういう偶然の機会、フェアトレード商品との出会いの機会をたくさん作りたい、というのが私のネパリでの仕裏に対する思いです。

入社以来、地球市民かながわプラザ内の直営店「ベルタ」の担当をしていますが、たまたま何かのイベントでいらした方が、いろんな国の手作りのものがあることに感心したり、おもしろがったりして買ってくださいと、フェアトレードが広がっていく手応えを感じて、とてもうれしく思います。皆様とお会いできるのをとても楽しみにしています。



楽しかったネパールダンス教室

11月28日、「フェアトレードのお店 ベルダ」の入る地球市民かながわプラザは異様な熱気に包まれ・・・というのは大げさですが、今回のネパールダンス教室の行われた創作スタジオ内は一種独特な空気になったのは事実。雰囲気を出そうと参加者にはパンジャビ（ネパールの民族衣装）貸しだしたのですが、総勢20名ものパンジャビの女性が一同に会し、ネパールのダンスを踊っているんですから！！何事かとスタジオを覗きにきた方も少なくありませんでした。

講師はアニール・サキャさんと伊藤和美さん。アニールさんは前回のネパールダンス鑑賞のときも妹のアルチャナさんと来て下さいました。今回の曲目は「レッツサンファイリリ」、ネパールといえばこの曲、というくらいの超代表的フォークソングです。振り付けは結構単純、どれほどの技術も必要としませんが、いざやってみると単純なほうが難しいかも...、10分もすると、参加者は汗だく、最初の頃

のお喋りもなくなって、講師を見る目は真剣そのものです。4パターンほどの動きを完成させるだけでもすっかり時間オーバー。それでも何とか1曲目完成させてみんなで踊りきったときの感動はなかなかのものでした。

このシリーズばげひげひ続けて下さいね の声も多数いただきました。

次の日にはスタッフ全員筋肉痛。日ごろの運動不足がばれたイベントでもありました。

廣田麻紀子



フェアトレードのお店

ベルダは楽しいイベントが満載です!!

ベルダでは、国際協力やフェアトレードについて共に考えていくために、また、協力の対象となっている国々の文化的すばらしさをご紹介しますために、様々なイベントを行なっています。

インド更紗・布たちのおしゃべり～染織工芸と職人たち～
7月12日(日) インドで職人と共に伝統的な染織を再現した伊豆原女史からインド染織の素晴らしさ職人たちの境涯についてお聞きします。

これは楽しい!
ネパールダンス教室
11月23日(月) 祝日
創作スタジオにて、アニールさんをお迎えして踊って楽しい

親子で挑戦
ネパール料理教室
8月23日(日)
親子でネパール料理を作りましょう。

ネパールの働く女性たち ネパール・日本～家庭・仕事・自立～
9月27日(日)
研修で来日中のロヒニさんから、女性の目から見た働く場としてのフェアトレードについてお聞きし、2部でシンポジウムを行います。

ネパール料理教室パートII
1月17日(日)
ネパール料理を作りましょう。
ベジタブルカレー、モモ、トマトアチャール

フェアトレード公開講座
フェアトレードを広めよう!
2月19日(金)、20日(土)
13:30-16:30 地球市民かながわプラザ料理室と栄区民文化センター(リリス)会議室

対象: フェアトレード店、輸入雑貨など小売店、女性起業家、NGO関係者、一般消費者
現地で活動している女性をお招きし、その有効性をみんなで話し合います。お茶とお菓子を食べながら和やかに参加して下さい。

* 時期はまだ未定ですがインド映画上映も検討中です。詳しくは、ネパリ・バザーロまたはベルダにお問い合わせください。

至大船 至横浜
本郷台駅
地球市民かながわ
プラザ2F
フェアトレードの
お店 ベルダ
駅より徒歩1分
TEL: 045-890-1447
FAX: 045-890-1448

卸も全国的にしています。
お問合せ下さい!

国際理解にお役立て下さい。通信販売カタログ

ネパリ・バザーロでは、ニュースレターの発行、フェアトレード関連の本の出版、市民の方々の国際交流、支援の理解を深める活動も行っています。また、フェアトレードの活動に広くご協力頂けるように、通信販売カタログを作成していますので、ご興味がある方はご請求下さい。

学校、教育機関へのフェアトレード商品の貸し出し、講演会、お話会など、開発教育のご協力も実施しています。お問合せ下さい。

(編集の担当が一部変わりました。宜しくお願いします。)



「百聞は一見に・・・」と言いますが、今回現地レポートが多うれしい限りです。大勢の人に現地を見ていただきたい。
(昌治)



冬休みは、協力隊で派遣されている友人を訪ねてジャマイカに行き、本場のコーヒー栽培を見てきました。(早苗)



21世紀は真近。良き社会を消費者の立場から創造する、そんな実態のある選択の場が更に広がって欲しい。調査、研究が今年のキーになりそうです。(健二)



今回アロー織りを調べて、手のかかる作業からうまれてくるものの魅力を感じました。
(洋子)

発行所: ベルダレルネーヨ
ネパリ・バザーロ
247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町274-15
第2中山ビル3階
Tel: 045(891)9939 Fax: 045(893)8254
http://www.yk.rim.or.jp/~ngo
E-mail: ngo@yk.rim.or.jp

1999年2月発行
編集責任者: 太田昌治
編集担当者: 土屋完二 魚谷早苗
春山洋子
編集協力者: 他スタッフ一同